2022 年 2 月 28 日

宛先： 西山和子成年後見人　弁護士　加藤　貴大　様
写し：　辻恭子代理人　弁護士　谷　直樹　様
　　弁護士　岩永　隆之　様
　　西山キミヱ成年後見人　安部　高樹　様
　　辻　竜也　様
　　西山　円

道後湯之町　西山　美年子

件名： 義妹　西山和子の救済をお願いします。

和子の後見人　加藤弁護士は、被後見人　和子の立場で、和子を守ってくださる、と信じています。
２０２１年３月、加藤弁護士が後見人に選任された、とわかった時時、道ノ尾病院に入院している
義妹　和子に伝えたいと思いました。

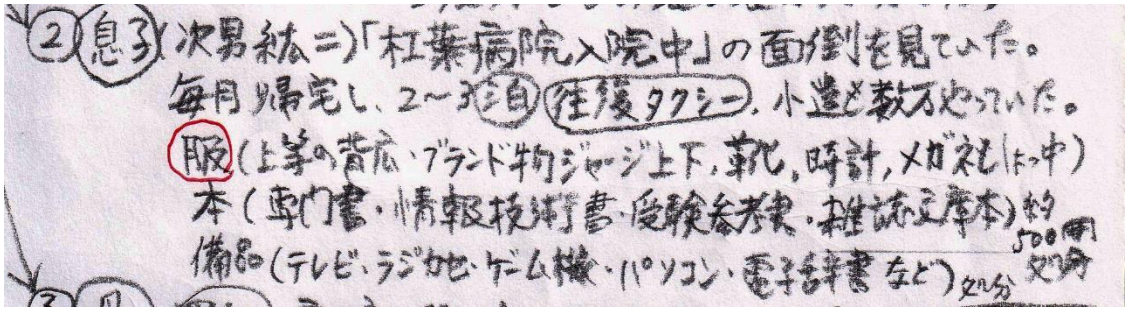
ソシアルワーカー　土井氏に、下記の伝言をお願いしました。
「和子に先祖さまが遺してくださった諫早の土地の賃料が、和子の口座に入金されるようになったこと。」、「和子さんはお金持ちだから、何も心配しなくてよいよ。」、「堂々としていなさい。」、
和子さんは、わかった時は「うん、うん。」とうなずかれます。
その時、その場では、わかってもらった、と思いました。

留太郎父からの相続のとき、夫　紀男は和子、紘二を禁治産者としないで、諫早の土地を相続させました。
その賃料をキミヱ母が長年に亘り、ゼロになるまで毎月、費消していたことを後見人報告で知りました。

キミヱ母には多くの不動産と動産が、生活に困らないほどにあったのに、キミヱ母は、障害者
子供二人のお金に手を付けたのが理解できません。
毎月の賃料は、キミヱ母の遊興娯楽費（化粧品、服、外食、旅行）に費消されたのではないかと想像します。

義弟　紘二も杠病院に40年近く入院中、２０１９年３月、７６歳で非業の死をとげました。
入院中には紘二は諫早の賃料を受取った記録はありません。
紘二はキミヱ母の口座からの支出に次の記録があります。
　　１回だけ4万円渡した。
　　１０万円以上の支出はありません。

下記の画像は、安部後見人からの問いに対するする辻恭子直筆の返事です。


②息子 次男紘二「杜葉病院入院中」の面倒を見ていた。
毎月帰宅し、2～3泊 往復タクシー、小遣ど数万渡っていた。
服（上等の背広・ブランド物ジャージ上下、革靴、時計、メガネ（ケース中）
本（専門書・情報技術書・受験参考書・雑誌・文庫本）約500冊
備品（テレビ・ラジカセ・ゲーム機・パソコン・電子辞書 など）処分

辻恭子は上記のように紘二が贅沢をしたような記述をしています。

しかし、紘二の身なりはいつも、みすぼらしく、着古した上着、型崩れした靴、眼鏡のつるはセロテープで補修していました。
長期入院のため、背広を着て、革靴をはいて外出することはなかった筈です。
病院からの外泊のとき、同居していた辻朱美、竜也が紘二の質素な身なりを見て知っています。
紀男も長崎に帰省した折、たまたま病院に戻る紘二と会いました。
その時は、みすぼらしい身なりに思わず可哀そうに、と身をつまされる思いをしたそうです。

和子、紘二は、20代から30代、40代、50代、60代、70代、　長い長い貴重な時を奪われました。
和子は2月27日に81歳になりました。
両親から失意の底に落とされ、何も自己主張できない、つらく、悲しい。
言葉をいくら並べても取り返せない重い人生でした。
お金には代えられません。
でも、でも、
子供を思わない母が費消したお金は、キミヱ母が償って欲しい、と思います。
時効なしで、全額返済して頂きたいです。

犯罪なのに、親族だから、刑を免除される。
悪いことをした人が勝ちだ、と言うこの世の中、血族間の理不尽なことを受け入れないといけないのでしょうか？
裁判の手続きをすることが、和子が報われることになるのか、迷っています。

時効は、誰が、何時、何処で、どのようにして決定されるのか、教えていただきたく思います。

法律のことは何も知らず、一市民として、主婦としての知識しか持ち合わせていません。

義弟　紘二（40年以上入院）の非業の死、和子の50年以上の自由を奪われた人生を思うと、

時効は許せません。
憲法の正義・公平の理念に反すること、と思います。

和子の入院先、病名は、血族、姻族に知らされていませんでした。
２０１７年１月に私どもと次男家族で2つの病院を訪ねました。
将来、西山家の墓を守り、繋いでいく知志（キミヱの曾孫）に和子と紘二を合わせておきたい、
と言う敬子の決断でした。

和子、紘二とも自分の口座を持ち、そこに障害年金が振込まれ、その範囲内で生活をしており、
諫早の賃料はつかっていません。
紘二の通帳は、杠病院に預けられていました。
和子の通帳は、恭子が「病院に預けた。」と嘘をついて隠蔽していました。
安部後見人は辻恭子の言を信じ、私共に嘘の報告をしました。

和子さんとは、２０１７年にお会いした後、美年子が交流を持っています。
１ヵ月に1度くらい、ソシアルワーカーに電話して和子さんの状況を聞いています。
和子さんへは、絵葉書、カード、手紙など、折に触れて出し、タオル、人形、花束、などを
送っています。
葉書、手紙、など、人との交流を一番喜んでいるそうです。
今まで、和子さんの笑った顔を見たことが無い、とソシアルワーカーは言っていましたが、
最近、やっと笑顔が見られるようになってきたそうです。

綺麗なものが好きで、ソシアルワーカーが「きれかね！」と声をかけると、「うん、うん。」と
うなずかれるそうです。

食事は軟食で、スプーンを使って自分で食べ、毎日、完食だそうです。
いつも元気だ、と聞いていましたが、２月の誕生日にお花を送った時に電話がかかってきて、
「年齢を重ねているので、急変することもある。」と初めてききました。
急変の時には、私共が四国から行くのは時間がかかるので、「横浜から次男の妻　敬子が駆け
つけます。」と伝えました。
和子さんの残された日々を少しでも楽に過ごしていただけるには、どうしたらよいか？
何もできないことを心苦しく思っています。

「コロナ禍明けに会いに行きます。」と手紙で伝えています。
待っていてくれているようです。
以上、